派遣国：米国・マダガスカル

平成 18 年度入学
京都大学大学院・アジア・アフリカ地域研究研究科
5 年生
西本　希呼

1. 研究テーマ

報告者の研究テーマは、現地調査で、語彙・例文の採集、自然発話の観察と録音、口承文芸の記録を行い、それによって得られた資料をもとに、マダガスカル語 Tandroy 方言の音韻・形態・文法などの諸側面に関する包括的かつ体系的な分析・記述を行うことである。2010 年 12 月に、大学院 5 年間の研究成果を博士論文としてまとめた。

2. 派遣の内容

2.1 米国派遣：国際学会参加・発表

2011 年 1 月 12 日－14 日にニューヨークで開催された国際学会 Conference on the phonology of endangered languages にてマダガスカル語 Tandroy 方言の主に音韻の項目について学会発表を行った。アメリカをはじめ世界各国から集まった主に危機言語や少数言語の記述を専門とする研究者、学生と活発な議論を行い、有益なコメントを得た。また、オーストロネシア語研究を専門分野とする研究者と知り合いになれ、今後学際的交流を行う上での人脈形成にもなった。

2.2 マダガスカル派遣：学術調査

2011 年 2 月 16 日から 3 月 16 日の約１ヶ月間、マダガスカルで学術調査を行った。2010 年 12 月に提出した博士論文の公聴会で得たコメントを反映して、これまでの調査データの不足分を補いための調査を行った。主に、マダガスカル語 Tandroy 方言の動詞カテゴリーに着目し、Toliara 市のインフォーマントの協力を得て、約 70 の動詞の 3 つの変化型と、例文を採集した。

写真１　Ambovombe の raketa 売り場

従来のマダガスカル語 Merina 方言の研究では、表 1 の I 型は能動態、II 型は受動態とされてきた。I 型は独立型人称代名詞をとり、II 型は接辞型人称代名詞をと

るのが、形上の違いである。博士論文では、動詞を、最近のマダガスカル語研究（主に標準語）の動向に従い、active　verb (表の I 型)と non-active　verb（表の II 型と III 型の２種）にわけた。また II 型と III 型は、II 型を passive verb,　III 型を circumstantial verb とした。　しかし、その分類では説明がつかない側面が沢山あるため、動詞を I 型、II 型、III 型と仮に分類して~~今後~~分析を進めることにする。

【表１】動詞の３つの変化型と名詞形

語根	I 型	II 型	III 型	名詞型
álake（とる）	málake (malake raho　私はとる。）	aláe (alaeko　私はとる。)	iála	fiála (ピンセットなど、道具)
命令形	mangalá	alao	ialao	
語根	I 型	II 型	III 型	名詞型
sókake（開ける）	manókake (manokake raho 私は開ける) misókake (開いてる)	sokáfañe（sokafeko 私は開ける）	anokáfañe（開ける）	fanokáfañe 開ける場所、開けるための道具
命令形	manokáfa	sokáfo	anokáfo	

Tandroy 方言の研究から、受動態が元来備えた意味や機能を II 型の動詞は備えていそうにないというのが、これまでの現地調査で得た知見である。用法に関して、2011 年の調査で約 70 の動詞をサンプルに調査を行った。そこで、I 型と II 型の違いの一つに、アスペクトが関わっていることが明らかとなった。

たとえば、II 型の例文 a は、行動をしようと決意しているが、まだ実際に行動をおこしていない。一方、I 型の b はすでに行動が進行している、もしくは、行為が確信されている場合に使われる。

a. Alae-ko　ty　hatae　tia.　　私はそこの木をとる。
　とる-私　冠詞　木　そこ
b. Mangalake　ty　hatae　tia　raho.　　私はそこの木をとる。
　とる　冠詞　木　そこ　私

III 型の用法と II 型の用法の違いに関してはまだ多く不明な点が残る。名詞型は、単に動詞の名詞型ではなく、道具、場所、手段など文意によって意味が流動的になる。今後は、今回の調査で収集した 70 の動詞の I 型、II 型、III 型、名詞型のサンプルを例に、

詳細な分析を進める。

また、Tandroy 方言話者の主な居住地である Ambovombe 村では、高齢の村長に依頼して、民話の録音を行った。今後のマダガスカル語諸方言間での比較研究を開始するために、地理的には Tandroy 方言の隣に位置する Tanosy 方言話者が多くする Fort Dauphin に滞在し、研究協力者を見つけ、Tanosy 方言の簡易調査を行った。

3. 派遣中に印象に残った経験

3.1 米国

米国での国際学会では、記述言語学を専門とし、世界各地でフィールドワークを行っている研究者と積極的に意見交換を行う場を得て、研究を深化させるよい刺激となった。母語話者の住む地域へ赴く言語調査のみならず、ニューヨークで研究を行うアメリカ人研究者は、多くの移民が居住しているという地政学的背景を上手く利用して、世界各地の言語の調査・記述を行い、また、消滅の危機に瀕する言語のドキュメンテーションもニューヨーク在住の母語話者を対象に取り組んでいるという点が印象的であった。

写真 2　ニューヨークの学会風景

3.2　マダガスカル

マダガスカルを訪問するたびに印象的なのは、豊かな食文化である。米を主食とするこの国の食文化は、日本人にとって慣れ親しみやすい。ランブータン、ライチ、ザクロ、スイカ、マンゴー、パパイヤ、パイナップルと多種多様な果物に加え、伊勢エビ、生ガキ等の海産物、イノシシ、鳥、豚、牛など、毎日新鮮な食材でその場で調理してくれる。写真 2 に写る Tandroy 族の一家は、Androy 地方から職を求めて、Fort Dauphin に移住し、現在は伊勢エビをとることで日々の生活を営んでいる。

写真 3　Fort Dauphin の研究協力者一家

2006 年から断続的にマダガスカルを訪問してきたが、来るたびに驚くことは、都市

開発のスピードの速さである。例えば、田舎の民宿やレストランでも無線 LAN に接続することができた。携帯電話は一人２台持っている人も少なくない。仕事先から連絡をとるためにと、小学生の子どもに携帯電話をもたせている親もいる。Toliara 市では、Tandroy 族が生業としている人力車に、新しいタイプが進出し、現在 Toliara 市には自転車でひく人力車が４台導入されていた。本来人力車は Tandroy 族の生業であったが、自転車人力車は主に漁業を生業とする Vezo 族が所有し、今後普及させたいという意志を示していた。マダガスカル全土においても自転車人力車が普及しはじめていると言う。

写真 4　Toliara 市の新型人力車

4.　目的の達成度・反省点

マダガスカルという発展途上国特有の治安問題、衛生問題を抱える国では、滞在期間をフルに活用して研究を遂行することは、困難である。今年も、食品衛生上の問題や、雨季という不慣れで厳しい自然環境が重なり、体調を崩し、すべての滞在期間を調査に充てることはできなかった。しかしながら、インフォーマントの熱心で忍耐強い協力のおかげで、この調査で目標としていた博士論文のデータ不足分の補充と、Tandroy 方言の時間表現の使われ方の再確認、動詞カテゴリーの詳細な調査など一定の成果を上げることができた。

5.　2011 年度の派遣における課題と目標

2011 年度からは、マダガスカル語研究を発展させ、マダガスカル語のオーストロネシア語圏の中での位置づけを理解するためにも、調査地を太平洋の島々へと拡大していく予定である。また、12 月からは、フランス国立東洋言語文化研究所で客員研究員として、マダガスカル語言語文化研究に関する共同研究に携わる予定である。

今後の課題と目標は、フィールドワークを基盤として（i）オーストロネシア語圏における社会や文化の変遷を、数的概念に着目して記述・分析すること,(ii)マダガスカル語諸方言やインドネシアの諸言語が、どのような歴史的経緯を経て現在のそれぞれの体系に至ったか、オーストロネシア比較言語学的研究によって明らかにすることである。さらには、(i),(ii)の現地調査で得られた分析結果を基に、それぞれの地域社会における科学史と社会の関わり、人間の営みと自然との共存を明らかにすることを目標とする。